

第 21 話 皇太子の外遊と摂政就任

ほうていばんり じゅんゆう かんけい
鵬程万里、半年にわたって欧州をご巡遊。 一路平安にご還啓。
やまい せつしょう つ
ついで、天皇の病が久しきにわたり摂政の任に就かれる。

こうたいし ひろひとしんのう がくもんじょ かてい きかい かんいんのみやこと
大正 10 年 3 月 3 日、皇太子裕仁親王は、ご学問所 7 ヶ年の課程を終えられたのを機会に、閑院宮載
ひとしんのう ちんだすてみ あまた ぐぶいん したが おうしゅうじゅんゆう ほうていばんり よこ
仁親王をとみなわれ、伯爵 珍田捨巳以下数多の供奉員を随えて、欧州巡遊のために、鵬程万里、横
はま しゅつぱん
浜港を出帆された。

みぞう せいじ
未曾有の盛時

そもそも皇太子の世界巡遊は、かつて我が国にない盛時です。 さきに大正天皇が皇太子の時に、親し
かんこく こうしつ と
く韓国の皇室を訪われた事はあったが、それはごく近いところの事でした。 今度は旅程もはるかに遠い
たいせん ろうしん おんみ あん
上に、大戦後まだ日の浅い折からでもあったので、老臣たちの中には御身の上を案じる者もありましたが、
しかし、国民の大多数はみぞう せいじ
みぞう せいじ
としてご決行を祈ったので、お母上のご英断によって決定になった
ものと漏れ聞いています。

よう ちちゅうかい
インド洋から地中海に

めしかん かとりの ぐぶかん かしま せんどう いふうどうどう ばんり ほうこ しょう
皇太子はお召艦香取に乗られ、供奉艦の鹿島を先導に、威風堂々、万里の波濤を越えて、インド洋を
へ ちちゅうかい
経て地中海に出て、ジブラルタルからイギリスに向われた。 途中、琉球の中城湾、香港、シンガ
ポール、コロンボ、スエズ、ポートサイド、マルタ島、ジブラルタルに寄港されて、その地の風物を視察に
ある めいさつ せんせき と
なり、或いは名利、戦跡などを訪われ、特にマルタ島では、世界大戦の際に地中海に出動して戦死した我
しょうそつ ついとうしきのぞ
が海軍将卒の追悼式に臨まれた。

えい こく
英国

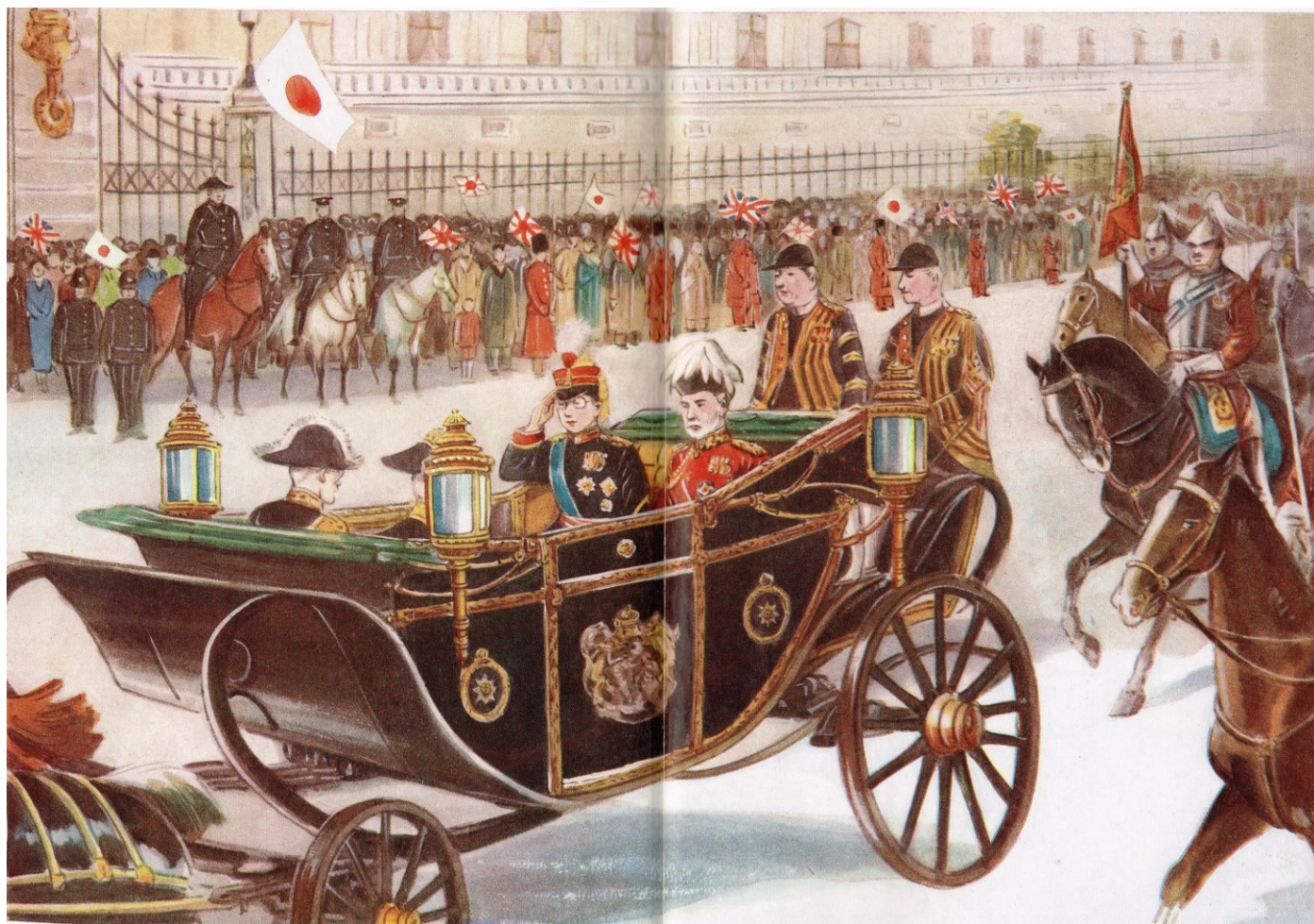
こ ぶ じ ちゃく でむか
斯うして 5 月 9 日、イギリスのポーツマスに無事に着。 英国皇太子の出迎えを受けて共にロンドン
ていしゃじょう でむか ばしや いっしょ きゅうでん
に向われ、ビクトリア停車場にお出迎えの英国皇帝ジョージ 5 世と馬車をご一緒してバッキンガム宮殿
はい
に入られた。 11 日にはギルドホールにおけるロンドンの歓迎式に臨まれ、市長の歓迎演説に対して
どうどう しょうかん の こくりつ びじゅついん じょういん かいん だいいいはくぶつかん
堂々と市民の前でご所感を述べられ、12 日以後は国立美術院、上院、下院、大英博物館、ロンドン塔、
オックスフォード大学、グリニッチ天文台、兵営などをご覧になった。 そして 18 日からは北方スコ
じゅんれき さら しさつ
ットランド地方を巡歴され、更にマンチェスターを視察の上、ロンドンに帰られた。 この間ちょうど 20
日にかんたい う
日にわたって英国の上下の心からの歓待を受けられたのです。

たいりくしよこく
大陸諸国

しゅつぱん
5 月 30 日、ポーツマスを出帆、その日フランスのル・アーブルに上陸、翌日パリに到着され、大統
しちゅう しさつ
領ミルランの歓迎を受け、2 日から市中を視察の上、6 月 10 日、ベルギーの首府、ブリュッセルに着。 国
でむか おうしつ きひん たいざいちゅう しんせんじょう こせんじょう
王アルベルト 1 世および皇太子のお出迎えを受け、王室の貴賓としてご滞在中、新戦場および古戦場

第 21 話 皇太子の外遊と摂政就任

^{じゅんらん}を巡覧、 同月 15 日、オランダのアムステルダムに到着。



英国 ロンドン

^{ひろひこうたいしでんか} ^{がいゆう}
裕仁皇太子殿下の外遊 ジョージ 5 世と

^{じょうこう} ^{たいがん} ウィルヘルミナ女皇にご対顔、その後、首府のハーグを訪問され、20 日にベルギーを経て再びパリにお帰りになり、諸方面の戦跡などを見学の上、7 月 9 日に地中海のツーロンからイタリアに向われ、11 日にナポリに入港、翌日ローマに到着、皇帝エマヌエル 3 世のお出迎えを受けた。ローマでは史跡などをご巡覧の上、ローマ法王を訪問し、17 日にナポリに帰着。翌 18 日、ポンペイの遺跡を参観の上、帰朝の途に就かれた。

こうしてポートサイド、アデン、コロンボ、カムラン湾などを経て、9 月 3 日の朝、恙無く横浜に入港、国民が歓呼の中にめでたく還啓された。

^{かんけい}
御還啓

この半年の外遊によって、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、イタリアの諸国の元首と親交を重ねられたのみならず、又、諸国の学芸、産業の実際から、大戦後の社会状態などを親しく視察された。見聞を広め、教養を積まれ、ご見識を高められたのは申すまでもないことですが、それと同時に、その堂々たるご威風によって、いたるところで国光を表され、我が日本の真価をヨーロッパの人々に知らせる上で、この上ない好結果をもたらせられたのです。まことにご孝徳の致すところで、私たちはただ感佩して仰ぎます。

第 21 話 皇太子の外遊と摂政就任

こうたいし せつしやう しゅうにん
皇太子が摂政に就任

時に、大正天皇には病が長くなられ、大政を親らすること
が難儀でおられ、この年の 11 月 25 日、皇族会議および枢密院顧
問の儀を経て、皇太子裕仁親王を摂政に任じ、天皇に代わって
内外の政務を執らせた。そもそもわが国における摂政は、第
15 代 応神天皇の代に、初め天皇が幼年でしたので、母の神功皇
后が代わって政治をされたのが始めです。皇太子の身で摂政に
なられたのは、第 33 代 推古天皇の代の聖徳太子と、第 36 代 孝
徳天皇および第 37 代 斉明天皇の代の中大兄皇子との 2 人以来
の事です。

皇太子裕仁親王は天資英明な上に、すでにご学問所におい



たいしやう
大正天皇

ていおうがく おさ さら じゅんゆう たいせい つうぎやう しんこう えいしゅ
て帝王学を修められ、更に欧州諸国を巡遊されて、世界の大勢にも通曉され、新興日本の英主として
の識見を養われています。国民は一方において天皇の平癒をお祈りすると同時に、皇太子を「われら
の摂政宮」と仰いで、切にそのご盛徳を敬慕した。

ふつえい どうれいし
仏英の答礼使

なお、ここに述べておきたいのは、さきに我が皇太子が欧州巡遊の際に訪問した答礼として、大正 11
年 1 月 20 日にはフランスのジョッフル元帥がわざわざ来朝し、ついで 4 月 12 日にはイギリスの皇太子
エドワード親王が来朝されたことです。言うまでもなく、これはみな我が国の国際的地位の向上とわ
が皇室の威勢が盛んで、列国元首との交歓がますます深厚を加えていることを示すものに外なりません。

なお、因みに言うと、ジョッフル元帥は、第一次大戦中にフランスの総司令官でした人で、大正 3 年 9
月 8 日、有名なマルス河の第一次の大会戦にドイツの猛進を破って、敵のパリへの進軍を食止め、また、
後に自らアメリカ合衆国に使いして、米国に、参戦、出兵を断行させた名将です。又、イギリスの皇
太子は今（注：この物語が書かれた昭和初期）の英国皇帝エドワード 8 世です。

（ 第 21 話 皇太子の外遊と摂政就任 終わり。 次は前頁に戻り、第 22 話 ワシントン会議 ）